前立腺がんにロボット手術

男性特有の病気で、近年急増している前立腺がん。早期に発見された場合、福島医大では主にロボット手術での治療が行われている。最新の治療法について同大泌尿器科学講座の小島祥敬主任教授＝写真＝に解説してもらった。

福島医大 がん診療最前線 ⑪

＊小島祥敬　泌尿器科学講座主任教授

前立腺は、膀胱のすぐ下にあるクルミ大の臓器で、精液の一部を作っています。つまり前立腺がんは男性特有の病気です。近年急増しており、2015（平成27）年には男性の新しく発症するがん患者数で、胃がんを超えて第1位になりました。

手術用ロボット「ダ・ヴィンチ」

早期で適応　開腹、腹腔鏡より利点

症状は進行しないと出ませんので、早期発見のためには定期的なPSA（前立腺特異抗原）検診が必要です。PSAは前立腺で作られるタンパク質で、前立腺がんで高い値になります。検診やかかりつけの病院で血液検査により測定できますので、50歳以上の男性の方は1～3年に1回は検査することをお勧めします。

高性能の画像検査

基準値（4・0ng／ml）より高い場合、前立腺の組織を一部針で採取（針生検）して、顕微鏡でがんの有無を診断します。福島医大ではPET―MRIという全国でも数台しかない高性能の画像検査が受けられ、針生検と組み合わせて診断を行っています。治療は、手術治療、放射線治療、薬物治療などがありますが、当科では早期前立腺がんに対してはロボット手術を主に行っています。

ロボット手術は、欧米で2000年ごろより始まりました。現在、前立腺がん手術のほとんどがロボット手術で行われ、開腹手術（おなかを切る手術）や腹腔鏡手術はほとんど行われていません。私自身は05年にフランスで、08年にアメリカでロボット手術を勉強した後、国内で開始しました。

当院では13年に当時の最新型機種が導入され、県内外からお越しになった約500人の患者さんに手術を行ってきました。私たちの取り組みは国内のみならず海外でも高い評価を得ています。その一方、県内では開腹手術や腹腔鏡手術を受けている患者さんも少なくなく、啓発活動に努めているところです。

正確で繊細な操作

ロボット手術といっても、ロボットが自ら手術を行うわけではなく「ダ・ヴィンチ」と呼ばれる高性能の機械の先端を、患者さんの体に開けた小さな穴から挿入し、医師が遠隔操作します。10倍以上に拡大された3次元画像により、開腹手術では見えない微細な構造が詳細に観察できます。ロボットの先端についた手術器具は、人の手より3倍の細かい操作を行うことができます。開腹手術や腹腔鏡手術に比べて格段に正確で繊細な手術操作ができ、出血量や合併症が少なく、小さな傷で手術を受けられるので、社会復帰が早いのが特徴です。

ロボット手術の長所を生かすことができると証明されているのは前立腺がんのほか、小さな腎臓がんとされています。今後も先進的で、できるだけ患者さんの負担が少ない医療を提供できるよう努めます。

＝次回掲載3月25日